（四下拉図）

山田道夫監修『藤原清徳尾長の時代』より

藤原清徳尾長の時代は、平安時代の初頭であり、
大いな文化・政治の変革が進行した時期です。

（図）

藤原清徳尾長の時代は、平安時代の初頭であり、
大いな文化・政治の変革が進行した時期です。

（図）

藤原清徳尾長の時代は、平安時代の初頭であり、
大いな文化・政治の変革が進行した時期です。

（図）

藤原清徳尾長の時代は、平安時代の初頭であり、
大いな文化・政治の変革が進行した時期です。

（図）

藤原清徳尾長の時代は、平安時代の初頭であり、
大いな文化・政治の変革が進行した時期です。

（図）

藤原清徳尾長の時代は、平安時代の初頭であり、
大いな文化・政治の変革が進行した時期です。

（図）

藤原清徳尾長の時代は、平安時代の初頭であり、
大いな文化・政治の変革が進行した時期です。

（図）
これを越える数値は内田正雄の内田正雄の『日本歴史』に述べられているが、すでに明治九年に固化していたが、五万部と言えも驚異的な数値である四〜二〇頁。これより大いに、平渕作五郎『計画学』に示す四〜五部の段階が九〜三部の三点順不同に過ぎない。これについては、東京師範学校改訂日本歴史地誌が六〜四部である四〜二〇頁。た

しかし、教科文の上では、木村正雄『日本歴史』に示す部局が、すでに明治九年に固化していたが、五万部と言えも驚異的な数値である四〜二〇頁。これより大いに、平渕作五郎『計画学』に示す四〜五部の段階が九〜三部の三点順不同に過ぎない。これについては、東京師範学校改訂日本歴史地誌が六〜四部である四〜二〇頁。た
近代日本の史学を主導してきた立場においては、要旨をよく観察する。基軸は漢学者と国学者の双方が対抗した。漢学者は大政官系統の修史事業に参加したが、文部省の事業に参画して、ついで東京大学文学部・文部省の教授陣につながった。あるいは宮内省を勤めて祭祀、有職故実の調査に従事した。こうした官制と国学者の業績は、制度および学派の系譜を確実にトレースしなければ開かれた想定を招く。文部省の教授書編集にたずさわった国学者と修史局の漢学者が対抗関係にあったと想定するのは、昭和二年四月十四日であった「明治史要」・「公文録」がすでに文部省の教授書編集に従事した国学者たちが一団を形成して文部省に依頼して、大政官系統の漢学者たちは別個の修史事業を進めてきたと見做すのは、いささか小柄大きたきらいを免れない。大久保保利謙が想定するように、両者は協議することもままに学制の以前に改変を施した制度に集中的に事態になっていよう。これを気にして文部省の教授書編集に従事した官制と漢学者の関係をめぐり丁寧に初步的な考察を施した。
杉原芳野について、現代的な縦割りのシステムにより職務に従事したわけではない。それでも明治二年の当時から小中村菊次が国学者たちの一人を指導しており、学者の仕事については著作物の形式と内容を解析する手順が必要になる。学制の前期に文部省に在席した国学者についても、この手順を省略して印象的な断定を与えるのには、慎重である。

（4）木村真鈴の教科書編集と文書をめぐり考察する。特に、未完成に終わった『国史案』『日本史要』について詳述する。それにより、分類式に日本文化史を叙述するのに志向した状況が証明できる。そして、彼が狩谷望之の系譜をひき、訓読や用字の考証に精密であった様子をも紹介した。
官制・著者の系譜—明治二年に着目—

本稿筆者は大学史学事・山内豊信の紛争過程をふまえつつ、明治二年二月から始まっていた修史事業の制度『太政官類典』第一編二十九の後半になるとは紛争状態になった。明治二年六月十五日に、昌平学校を改組して建制された大学校別弁・松平慶永は、明治十八年に文部省を創設した文部省の教育政策に影響を与えた。

伊能義則（八〇八五～八七七年）の門人である。彼は下総佐原の人。江戸において小山田與資の助言を受け、明治五年二月に神聖教導に就き、八年四月に大学教授に任じられ、その後も大学教授に任じられ、ついに大学教授に就任した。伊能義則は江戸に門戸を張り平田派と関係していた。明治五年三月と文部省を創設したと思われ。}

学制の制定において大学校の別弁・松平慶永は、太政官の改革を実行するため、伊能義則を初めとする学制研究の関係者を招いた。このため、伊能義則は大学校の改革に関与した。
明治二年の修史制度

近代日本の修史制度は、明治二年四月の慈眼の御仏像法により、史局が開設され、政相の三条実美に総裁として命じられたが、根幹にならない意味について考観の必要をみとめなかった。本稿は、その御仏像法により、二月に通り経過をたどる方策により、教科書編集、修史事業をめぐる官制および学派の事情が理解できると思われる。
なよるも、関係した第二次史料が依然として最低限度の質である。それは見落つできない。従来には、後年に編纂され浦公文書から拝げて無断者に使用していったのであるから、不用意な手法があっただけ、活用してきた『法政類典』や『法規分類大全』は、史料の本質が古典的史料研究法、第二等級史料の実証を確立していった学術上の特質を見失う。本研究は学制以前史に着目して、学制以後との連続性に着目して、学制以前史の著作の発展であった。その特長は諸学士館であった。学制の立場から少年を教育しようとした。官にいた漢学者を総称として定し難い一例をあげた。明治二年（八四八）に蔵書として、『続編』が発行、它是 demolished と見做すのは、こうした事例から省察してやや適当さに。これに迫られかの所を、安永以前の概説をふまえて、彼らの著作物に集中して、制度と学術思想を組み合わせて解析する。大藏作業、学問方法が方向として、学制を、明治以後。
行政官の首長は前定三条実美が首長である。一月、三条実美は京都に勤務して、三月に京都から帰郷に従い東京に向かった。明治

元年後半の政事は未定三条実美が首長である。三条実美が京都に勤務して、三月に京都から帰郷に従い東京に向かった。明治

元年後半の政事は未定三条実美が首長である。三条実美が京都に勤務して、三月に京都から帰郷に従い東京に向かった。明治

元年後半の政事は未定三条実美が首長である。三条実美が京都に勤務して、三月に京都から帰郷に従い東京に向かった。明治
日により昌平学校頭取。そして十二月二十三日には、学校権利事に発令され

右の伺書は、すぐに決裁されている。また、昌平学校の通知している。東京の新政府は、急ぎして頼もしい。他の文献も公家は交流に多用であり、昌平の土方久元が大官を歓迎して要筆を連絡しているのが散見する。戦時下であり、学事の官庁

問題は、実務開始の命令にある。昌平学校が発出した明治二年三月十八日の命令に至る左の様式により職員を発令した。この史料は写

大体において同じ時代である。江戸の履歴の特徴については後述したい。ここでは発令の文書に限定して確かめておきたい。この人事

是、別の方策により確実にできる。明治二年三月十七日付、上級庁の行政官は横山由清に宛て、学校出仕を命じた。つまり、翌日の明

治三月十八日付、発昌平学校官宛、横山由清。二、史料編集、御用、六国史料正兼務申付候事」こと。明治十二年十二月四日付、

元老院上申書である元老院権少書記官であった横山由清が、一月二日に病没したのに際して、功績に報いして追賜を贈賞したのであった。その書類に添付された履歴書の一節にこの記事がある

明治初年の改革、教科書、国学者

日により昌平学校頭取。そして十二月二十三日には、学校権利事に発令され

右の伺書は、すぐに決裁されている。また、昌平学校の通知している。東京の新政府は、急ぎして頼もしい。他の文献も公家は交流に多用であり、昌平の土方久元が大官を歓迎して要筆を連絡しているのが散見する。戦時下であり、学事の官庁

問題は、実務開始の命令にある。昌平学校が発出した明治二年三月十八日の命令に至る左の様式により職員を発令した。この史料は写

大体において同じ時代である。江戸の履歴の特徴については後述したい。ここでは発令の文書に限定して確かめておきたい。この人事

是、別の方策により確実にできる。明治二年三月十七日付、上級庁の行政官は横山由清に宛て、学校出仕を命じた。つまり、翌日の明

治三月十八日付、発昌平学校官宛、横山由清。二、史料編集、御用、六国史料正兼務申付候事」こと。明治十二年十二月四日付、

元老院上申書である元老院権少書記官であった横山由清が、一月二日に病没したのに際して、功績に報いして追賜を贈賞したのであった。その書類に添付された履歴書の一節にこの記事がある

明治初年の改革、教科書、国学者
引用した文言を改変しない。
史料編纂六史校正御用掛か史料編纂掛六史校正兼務なのか。

制度史の立場から者目詐れば、右の明治二年三月十八日の方命令には、旧幕府の和学所（和学講談所）の事項から連絡が認められる、幕

府官立になっていった学所は、幕府武力の支配下に編入していた。講義や編纂に従事していた者たちは幕府からの支持を受けているの

が、封建社会の特性に従った。幕府が瓦解した時期における和学所の制度は、慶応三年三月十八日御用掛が刊行されているので、かなり確

実に理解できる。職員の身分は幕末御用掛改革により陸海軍からの出役であった。学事の計画は林大学頭が命じた。徳川慶喜の将軍宣下

に付随して慶応三年八月十五日に報告した職員名簿がある。合計四十一人であった。編纂事業と、そのための人材育成が同時に進行す

るシステムであった。そこで右の三名が記載されている。すでに文久三年十一月、和学所稽古所の会介は、木村荘之助正経、小中村将

曹恭次、横山保三田清三、黒川主水春村、藤田大次郎の五名であった。

右の名前は「万葉集抄目提要」・「万葉集抄目」を仕上げていた。これらは、明治二十二年二月十八日、大学校大学頭から達書により、

明治十二年八月十七日

の序がある「万葉集抄目提要」・「万葉集抄目」を仕上げに林大学頭が命じた。徳川慶喜の将軍宣下

に付随して慶応三年八月十五日に報告した職員名簿がある。合計四十一人であった。編纂事業と、そのための人材育成が同時に進行す

るシステムであった。そこで右の三名が記載されている。すでに文久三年十一月、和学所稽古所の会介は、木村荘之助正経、小中村将

曹恭次、横山保三田清三、黒川主水春村、藤田大次郎の五名であった。

右の名前は「万葉集抄目提要」・「万葉集抄目」を仕上げていた。これらは、明治二十二年二月十八日、大学校大学頭から達書により、

明治十二年八月十七日

の序がある「万葉集抄目提要」・「万葉集抄目」を仕上げに林大学頭が命じた。徳川慶喜の将軍宣下

に付随して慶応三年八月十五日
事業および職員のみが決せられたのでなかった。明治二年三月二十二日。公文類書第一編第二十三巻によれば、旧史編纂国史校正局（文化六年以来の、秋元訳、東京六番町元住所に「開庁」と「五丁」）は、旧幕府時代の和学講説所・和学会の事業であつて、史料編纂国史校正局（元住所）に史料編纂国史校正局（元住所）を委任していた。

鳴海に家産の到達があった。見習として鳴海詔を起用しているのは、彼の学問の業績が判然しなくても見習である。史料編纂が鳴海の事業と見做す発想があった。これは、その後でない封建的、社会の発想であった。三月十八日、事務の次に、四月四日。府政、三条家文書、文書類の部、一〇一。特別な官吏、三条実美に照らしの宸翰、御批。この御批文書を内閣で見られるような心得がある。王政復古の歴史的意義が強調されている。漢学の系統、文献集に使用されている用語を分ける方法が使用されている。官撰史書を目指して、歴史学・地理学の範疇を目的とする観念が推定できる。職務は史料集の編纂にはない。どちらかと言いたい、三月十八日、事務の次に、四月四日の宸翰は、事務を変動させ、五月二十一日には追加の人事があった。朝廷の本音が二十一日付の件に応じたと思われる。

三月十八日、事務の次に、四月四日の宸翰は、事務を変動させ、五月二十一日には追加の人事があった。朝廷の本音が二十一日付の件に応じたと思われる。

明治初年、の史書は、「昭和二三」が修史事業に参加した。同時に、すでに東京に勤務していた、昌平学校の漢学者、「七九九八八〇」、谷森善臣「八七一九一二」が修史事務に参加した。
三名鏡朝・藤野正秀・岡松辰。も追加して発令された別表1を参照。この三名は旧幕府に通じる人材ではない。すでに明治に年十月
十日、新制の昌平学校、二等教授に任用されていた。合計五名の追加は、三月十八日に旧幕府の事務に縁のある江戸派の国学者が起用され
た措置に対する、新政府の各方面からの反動であったか。

五月十八日の追加人事は三月十八日の人事と最初から数えられた総合的な措置であったろうか。考を必要とする。

それから考で、公文類聚の「官文類聚」が引用する「大学源流」によれば、五月二十二日、史料編纂国史正庁の局に改組される。五月二十八日には学神祭があり、八月一日に中央政府が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。五月五日は大学令、史料編纂六

国史正庁の局が学校に改組されたのは、旧学を大学に改組したのが、旧学の学校である。昌平学校は大学令に改組される。八月三日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日に中央政府が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭があり、八月五日が国学・漢学が合同した大学を設立するという意味である。八月一日には学神祭あり
国史考閱とは厳密には意味不明である。強いして解釈すれば出来なかった国史（もろもろ後に現われた編年体の史料集ではない）。

文章で説明された意味での国史を参照する外の指導者の意見ではない。が、『東京官職志』第三冊、四八頁、平手鉄胤が京都の正造（正造）に所属する四四の指導者の意見である。と夢のよう自然であろう。

同じく五月四日には、京都から移動してきた谷森善長（「八一」、「一九」）が発令された。この場合も、彼にあたる文書類が発出された。これを見ると、京都から移動してきた谷森善長は三条西家の使者から出された。伴信の入門で学問と習慣から帰した。文久三年（「八六三」）の神武天皇陵を報告したが、宮中に都がおいて数ヶ月に叙位された。

「四勢方」は平安時代に国史考験の過程で出来た。大久保利通が説明するように、明治三年七月には一斉に教官が発令されて、大学校が八月に開校した。九月に

明治初年の修史、教科書、国学者

学派の少博士の頼徳文（又次郎）、藤野正啓（立馬）、岡松辰（畑谷・辰菅）の三名であった（別表1を参照）。彼らは、新政府が再構築
した大学校の教官であった。この書類は所収の『太政頼典』の編者は、こう略説している。史料編纂国史校正局改メテ国史編纂局ヲ
開ク。職官沿革表ヲ作ク。此時史料編纂及六国史校正ノ名ヲ挫へ漢文ヲ以テ国史ヲ編纂スと。これは正説をついている。名称が
変更になったのに連動して、修史の内容も変更になった。これを理解できたのである。

ここに掲げられた漢学者三名は、どのよう経歴であったろうか。明治元年十一月頃の昌平学校は、鹿児島藩の水元成美（保太郎）
が首席の一等教授で、二等教授には旧幕府の最後の儒官であった芳野金陵立篤、および広島藩の頼徳（長峰・又次郎）の二人であった。三等教授には蒲生澄蛻、沼田藩の川崎亜助、旧幕府の儒官であった塩谷義誠（修輔）、熊本藩の生駒為朝（慎太郎）で
ある。京都から東京に合流して来た平田鐵胤は、対抗意識を高揚させて、こう言う。大学校へ四年四時御用集会、谷森氏（爾也）秋元
註。以下、同断。山田有義、西川吉輔、丸山作崇、二宮事野河野河野春人、也等。先に八水保太郎（成美、青山春夢、延光）、頼
ループの首席が水元成美であるのを、言っているわけではない。

右の明治元年十月二十九日付、漢学者の三名頼徳、藤野正啓、岡松辰は、対抗意識を高揚させて、こう言う。大学校ヘ四年四時御用集会、谷森氏（爾也）秋元
名ヲ挫へ、塩谷義誠（修輔）、吉野立篤、世音トト。東京の大学校において国学・漢学の両派が紛争になる時期である。漢学者

明治三年七月二十三日付、漢学者の三名頼徳、藤野正啓、岡松辰は、対抗意識を高揚させて、こう言う。大学校ヘ四年四時御用集会、谷森氏（爾也）秋元
に他ならぬ。名ヲ挫へ、塩谷義誠（修輔）、吉野立篤、世音トト。東京の大学校において国学・漢学の両派が紛争になる時期である。漢学者

治局の事業に占領して重野安継、長野の一部であり、言語家産として尊敬された。国学の嘆と解釈であった。藤野正啓は後に
修史局の事業に占領して重野安継、長野の一部であり、言語家産として尊敬された。国学の嘆と解釈であった。藤野正啓は後に
学派の幹部になった。岡松辰は詩文家、法家、祖徳学派のある儒者ではなかった。史学の業績では戦
国時代遊話集の湯浅常山（常山論議）を漢説した。湯浅常山（七〇八一）、は岡山池田氏の藩士。祖徳学派の詩文家、古文辞
学者。援園派学者たちの逸話を略述した『文会集記』を吉川弘文館の刊行にかかる日本随筆大成第一十四巻に所収は、学界の人物や
業績を説明して得難い。そうした湯浅常山に関心を向けたのは、学風からして無理がない。岡松辰は大学の紛争を経験して、明治四年に
起用する判断があった。田村は、旧学所である東京帝京学術院をあらためて再認識した。後、四月四日付の宸翰には、その文言から帰納して、三月十八日付の人事職務の変更が報告され、四月四日付の宸翰には、その文言から帰納して、三月十八日付の人事職務の変更が報告されている。前記の事実を基に、その後の政治の動向を検証するには、今後の課題になる。したがって、後期の政治は、昭和二十六年、四月四日付の宸翰を解釈されて良い。

（海後宗臣編『『明治政治史』』、三一九頁）

（海後宗臣編『『日本近代教科書大系』』近代編、第二十巻、二三頁）

（海後宗臣編『『日本近代教科書大系』』近代編、第二十巻、二三頁）
（6）大久保利謙『日本近代史学の成立』、吉川弘文館、昭和六十三年、二七五頁。大久保利謙は、日本近代史学の成立を考証し、書物の発展と学問の発展を歴史的に考察している。 histology

（7）村上俊亮『日本近代史学の成立』、帝國大學文庫、昭和四十七年、九二一頁。村上俊亮は、日本近代史学の成立を調査し、書物の発展と学問の発展を歴史的に考察している。 histology

（8）中村多香『日本近代史学の成立』、帝國大...

（9）関西百年記念文化事業会編『関西百年記念文化事業会編』、帝國大學文庫、昭和四十五年、二 methane

（10）香取神宮宮詣編纂委員会編『香取神宮宮詣編纂委員会編』、帝國大學文庫、昭和四十七年、二 methane

（11）那珂通高『愛国団史』、岩手県歴史學會、昭和三十六年、二 methane
単に講義の範囲を越えないもので、その他の詳細は割愛いたします。

例：

1. 講義の目的
2. 講義の構成
3. 講義の留意点

例2：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例3：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例4：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例5：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例6：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例7：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例8：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例9：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例10：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例11：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例12：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例13：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例14：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例15：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例16：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例17：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例18：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例19：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも

例20：

1. 目的
2. 構成
3. 必ずしも
<table>
<thead>
<tr>
<th>十一月</th>
<th>順</th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>十月</td>
<td>順</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>大雪</td>
<td>順</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>十二月</td>
<td>庚</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

* * * * * * * * 順
* * * * * * * * 順
読者は、家庭において児童に教える材料に起稿したという。本文を一瞥した印象では、小学生には、やや無理か、随所に読者を配慮し、質問が設定してある。したがって教科書には無理であるものの、教育を考慮した教師用の著作物として認められよう。

二

歴史

桜原芳野は文部省の事業により分類式の文化史の叙述に成功した。

『文芸概論（明治二年）』の発展を指摘した。

『日本教育史概論（文部省厚生省）』が、明治十四年八月／日本教育史概論（文部省）に述べられている。それにより、歴史については『中庸』の次に、日本外史は『大日本史』が挙げられ、詩経に進むように指定されており、十九世紀を越えた状況に即している（二二頁）。

本編は『教育志略』として大規模、如電（一八五零年）を担当して桜原完治が示したが、この二人は同じく仙台藩が出身で、後述の普及や各地の藩校が重視し、発表された（二三頁）。新政府の教育制度は編年史に説明している（二四頁）。

桜原芳野は、標記の図書『日本教育史概論』のうち三巻の一部が著者の所に寄稿されたものであり、文献の構成について時代の順序と分類式を組み合わさり統一している（二五頁）。

その後の出版の普及や各地の藩校が列挙しており、文部省の事業により分類式の文化史の叙述に成功した。桜原芳野は、教育の周辺にある物質を中心にして、辞書式に立脚して書物を論説している。文部省の教育制度は編年史に説明している（二六頁）。

イ

印行

本編はアメリカ独立百年記念デルフォア万華のために著述されている。巻頭には概要、と題して、五十頁分をあてて文部省の造語及び外人教師を引用し、序で学の流れを略述して左国史漢とも言える学の階梯を著述している。二七頁において、『中庸』の次に、日本外史は『大日本史』があげられ、詩経に進むように指定されており、十九世紀を越えた歴史に即している（二二頁）。

ハ

種類

日本法令総論、儒学、学校、私学、科試、書学、画学、医学、薬物学、外科、鍼灸、歯学、塗装、付文具、紙、造紙、筆、墨、油煙、染料、松煙、染料。

時代区分は三分法により略述されており、文学の言語は広義の用語であり、学芸とも言える範囲に
なる。日本の文化の全般を扱わねばならぬ、音楽、芸術、生活、風俗の類は含まない『芸術類纂』の例言。第五条には音楽歌謡の編集にあたるものを含むが、『芸術類纂』の記録（二四三頁以下）は、文芸をめぐる周辺の諸要素が略述されている。しかし次に掲げる『教育志略』の概要が発展した。『芸術類纂』の文についての見解は、文芸の用を為す多きにかわり想象せし小説たるびに文芸の体に変り（二三六頁）。

不良の論評は古から史の関心を略述し、『資料』の本編の宣長により国学が発展した。なくさめ、教授の言葉の如く、看做し無視僧従各儒書の意を以て説き、逐に妄説を捏造し出して愚民を迷ったり、数多くの兵乱に其道を伝説し、遂に中古学者の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学としめて有古学とは歌人古歌のをのみを称し、皆門下に出る者多しと。また派国学の狭さ、書目を見る上至り、と歴史的革命があったと論じる。ついで福田春海をたれ、文筆卒業を大に古来の託訛を正し、初の世界を興す。神遊歴史詩等皆此により興る。と尊敬した。さらに『資料』の先の未発せざるを発明し、史学実歌学語学に至るまで、千有余年埋められたを尋ねて大に其学を興す。と申し上げて和学とし
<table>
<thead>
<tr>
<th>著者名義</th>
<th>総目録</th>
<th>年次</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>榊原芳野</td>
<td>明治六年</td>
<td>二</td>
</tr>
<tr>
<td>榊原芳野</td>
<td>明治七年</td>
<td>四三</td>
</tr>
<tr>
<td>榊原芳野</td>
<td>明治九年</td>
<td>五一二</td>
</tr>
<tr>
<td>小学読本</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小学録字翼</td>
<td>一</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
私見の限りでは、太政官系の修繕事業の澤山は、明治三年二月十六日、大・模範的な行政の実務を委ねた藤原基政が発令された「太政官沿革志」に見られる。明治五年九月四日に発表されたこの沿革志は、「太政官沿革志」を基礎にして、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然とした明治三年二月十六日発布の「明治二年令」に沿って、行政の実務を轟然した。
③木村正言の教科書、修史、古典の訓読

略伝（八八七一九一三。文政十年。正二年）

木村正言は、旧代学所に就任して図書館を司る国学者であり、明治前期には、明治二十年代に講義録『国文』が刊行された。その刊行にあたって、木村は著者の説明を参考に、国文学研究所の教授として、国文学や旧代学所の講義を担当していった。木村の研究は古代の文献、特に古典文学の研究に力を注いでおり、『万葉集』や『古事記』など古代の文献を頻繁に引用する研究で、現代の古典文学研究の基盤を作り上げた。

かかる一貫した研究は、明治二年には旧教の経済学の教育に関する研究を担当した。木村は、旧教の経済学の教育に関する研究を担当した。

すでに考察したところによると、明治二年には旧教の経済学の教育に関する研究を担当した。木村は、旧教の経済学の教育に関する研究を担当した。
学派の教官が連署して別部・松平慶永（馨）に上申した題書には、木村正彦を引用し、小博士・木村正彦、中助教・樋原芳吉、同黒沢真資の名義が認められている（『副島種民文書』）。これで木村正彦は、明治元年後半の慶應四年（1868年）に軍使を含めた権中書記に任じられた。権中博士の上席には中村周蔵が在任した。したがって、神道の祭祀や祝詞の制定をめぐる調査が行われた。明治四年（1871年）に、木村正彦は文部省の学部長に任命される。同月に改編して文部省に改称された。文部省の学部長は学部長である。（明治四年二月）

明治三年三月）によれば、木村正彦は司法省検事局の判事である（三ヶ月）。これにより、木村正彦は司法省検事局の判事がなされた。木村正彦は、この内務省の学部長に就任した。明治四年（1871年）には文部省の学部長に就任した。これにより、木村正彦は数少ない国学者で大政官少書記官に任じられ、法制部の学部長に勤務した。これは明治四年（1871年）に於て、司法省検事局の判事がなされた。
によれば本官は司法省少書記官であり、同時に文部省御用掛で東京大学に勤務している（六頁）。この記録によれば、同じ文部省兼

学制部の下付であったよう、それよりも以前になる、明治十年版の改正官員録によれば、小中村清剛は内務省文教局の四等官であり、

二等官には中村香がいる（七頁）。明治十年版の文部省編程局に勤務している（七頁）。後に小中村清剛は文部省編程局に勤務している

四等官に呉備しくなった速報を表す。明治時期の官公仕の職名を読むと、すでに明治以前に緊密な作業に着手していた稿本が出来ていた。

彼の活動は長い。ここでは明治初年、学制・教育令期に集中する。とりわけは、③歴史教科書。④司法省の修史。⑤古典を訓読する
手に取ってみた。

③歴史科教科書では「国史家」を着目して、彼の史料批判・古典の解読、用字の考察にすくれた資質を修史・教科書に発揮していたのを指摘する。よく言われる木村正辞と万葉集のために限定した眼では、学制前の時期における官の事業を従事した『国史家』を中心に。

学制期（明治五年・十一年）に木村正辞は、文部省の職務より日本史の教科書を著述・編集する（別報3参照）。これは、史料学および教科書の立場からは、注目される。後年の印象では万葉集・新解であるが、実際には新解以前にすでに万葉集をめぐる業績が蓄積できていた。この時期にはさらに、この眼が著者として官の側からの信頼があった。従来の教科書史家の「官史」を史の「國史家」の前書が視野にあった。

昭和三十七年（一九六二）に海後宗臣は、さらにこの国史家、史料学の視野について初め的な考察をした。木村正辞の国史家史は、昭和十年に編纂された文部省教科書編纂研究会『国史家』に収録されている。木村正辞は史料家としての眼や、内容編纂の方針が変わってきたことを明らかにすることを講じていると判定した。実証研究では、こうした教科書史家学の着目から教示される。

『日本史家』における南河通高的名義もある。南河通高的編集方針が変わってきたことを明らかにすることができると判断した。南河通高的編集方針が変わってきたことを明らかにすることができると判断した。
三

形式については、第一冊の冒頭には「凡例」がある。全七巻、歴史物語を教育するのが目的ではないので、本書の形式を示す必要がある。

第一章は、文庫および書法の構造が規定されている。従って、本文八で論じるものを構成する形態である。

第二章は、日記、類書、別記の小主題を設定して説述する。分類式の文化史である。従って、本文八で論じるものを構成する形態である。

第三章は、本文八で論じるものを構成する形態である。従って、本文八で論じるものを構成する形態である。
本書の編年体記述は大抵に省略してあり、通史の実体を有しない。史書の編年であるが、後世に伝わるという述べるとき、著述された『国史伝』は『日本書紀』と同一に記載される。本書の編年は次のようにある。

以下に、「政体文学・神事」と続き、文化史が分類例に列記である。本文も、この展開であり、凡例第五条の規定するように、皇帝本紀に接続される例では、1.本伝の文献として、次のような形式で、新天皇即位に関する新天皇の年号が、この形式で列記されている。

- 『国史伝』の書名の『案』は、未定の考えや考証を採用しているが、直訳するとき、著述された『国史伝』は『日本書紀』と同一の文献と記載されている。本書の編年体記述は大抵に省略してあり、通史の実体を有しない。史書の編年であるが、後世に伝わるという述べるとき、著述された『国史伝』は『日本書紀』と同一に記載される。本書の編年は次のようにある。

以下に、「政体文学・神事」と続き、文化史が分類例に列記である。本文も、この展開であり、凡例第五条の規定するように、皇帝本紀に接続される例では、1.本伝の文献として、次のような形式で、新天皇即位に関する新天皇の年号が、この形式で列記されている。
簡易海内無事なる」と九七頁。そして藤村の十二祭院智法に至る「憲法作業」を制スルコトヨリ始ルと一二〇四頁。これが、

農業関係（「四頁」から以下は藤村原作の担当であった。衣服飲食は藤村原作が担当した二八九頁）記事は神々から始まる三〇〇頁。

後年の司法省「憲法研究」に連絡した後述。「保御度」では「カヒロアター」の古語について略読している一一五一〇三頁。木

一頁。一例を挙げれば、伊勢神宮にみる神殿と古代の家屋について考察した（三〇〇四頁）。上古の衣服

最後の「古京遺文」を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）一八七文を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）

後述、の「文九遺文」を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）一八七文を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）

本書にも考証がころそしてある（二九三頁）。これらの場合には藤井田忠寛（文九）一八七文を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）

木村（および藤原）の歴史の遺物を採用して典籍の記述と連絡させようとする。出土品の武器残片（九一～九三頁）

や神宮の宝物である横刀を図示する（九四～五一頁）。あるいは「南都法隆寺二伝ノ所象牙尺あり」と九二九頁。

本書の第二冊、奈良時代末期は記事本末体の一面を保持した。第二冊、第一世紀の第三、「道鏡ノ乱」では、尊敬した狩谷望之の

後述の「古京遺文」を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）一八七文を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）

木村の四教科書のうちの後二号、国史案（日本史要）の二書は、なぜ未完成に終わらなかったのか。

木村の四教科書のうちの後二号、国史案（日本史要）の二書は、なぜ未完成に終わらなかったのか。

本書の末尾には藤井田忠寛（文九）一八七文を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）

本書に考証がころそしてある（二九三頁）。これらの場合には藤井田忠寛（文九）一八七文を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）

木村（および藤原）の歴史の遺物を採用して典籍の記述と連絡させようとする。出土品の武器残片（九一～九三頁）

や神宮の宝物である横刀を図示する（九四～五一頁）。あるいは「南都法隆寺二伝ノ所象牙尺あり」と九二九頁。

本書の第二冊、奈良時代末期は記事本末体の一面を保持した。第二冊、第一世紀の第三、「道鏡ノ乱」では、尊敬した狩谷望之の

後述の「古京遺文」を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）一八七文を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）

木村の四教科書のうちの後二号、国史案（日本史要）の二書は、なぜ未完成に終わらなかったのか。

木村の四教科書のうちの後二号、国史案（日本史要）の二書は、なぜ未完成に終わらなかったのか。

本書に考証がころそしてある（二九三頁）。これらの場合には藤井田忠寛（文九）一八七文を引用して、さらに藤井田忠寛（文九）
<p>| | | | | | | |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>**</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>*</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 『操形推檢』—推検内容【ノ】

推検内容である『操形推検』における内容は、各項目ごとに詳細に解説されています。推検内容の詳細は次の通りです。

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第一節</td>
<td>第一節の内容</td>
</tr>
<tr>
<td>第二節</td>
<td>第二節の内容</td>
</tr>
<tr>
<td>第三節</td>
<td>第三節の内容</td>
</tr>
<tr>
<td>第四節</td>
<td>第四節の内容</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 『操形推検』—結果内容【パ】

結果内容では、推検の結果に基づき、どのような推検が必要かを示しています。推検の結果によっては、さらに詳細な検査が必要となります。

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第一節</td>
<td>第一節の内容</td>
</tr>
<tr>
<td>第二節</td>
<td>第二節の内容</td>
</tr>
<tr>
<td>第三節</td>
<td>第三節の内容</td>
</tr>
<tr>
<td>第四節</td>
<td>第四節の内容</td>
</tr>
</tbody>
</table>
三八

本書には国学者に特有な法制史の理解があった彼の延喜式から大袈裟に引用している。後者は話す、凡諸の文書は『中世二見』『久世』など、双書の用語や訓読を能念に学んだものである。
立法事業に於ける民法の語彙

木村正辞が従事した後者は、著名とは言い難い。それでも明治初期の法典編纂には、語彙の編纂・制定が必要である。司法省の民法局の発足により、語彙の検討が行われた。語彙の検討は、司法省の発足後、速やかに着手され、明治十四年（1881年）に完成。民法の語彙をめぐる運動は、これにより始まった。

この著作（額原集・額原難解）は、明治時代に完成した大規模な民法の語彙集である。明治二十一（1888年）に発行された。この著作は、明治時代の民法の語彙集をめぐる運動を、ときに重要である。この著作は、明治時代の民法の語彙集をめぐる運動を、ときに重要である。この著作は、明治時代の民法の語彙集をめぐる運動を、ときに重要である。この著作は、明治時代の民法の語彙集をめぐる運動を、ときに重要である。この著作は、明治時代の民法の語彙集をめぐる運動を、ときに重要である。この著作は、明治時代の民法の語彙集をめぐる運動を、ときに重要である。この著作は、明治時代の民法の語彙集をめぐる運動を、ときに重要である。
金文についての序，以降に於ては，金文・卜文・甲骨文等の分類を基にした資料の紹介が行われている。秦始皇の枠組みを基本にして，彼の思想を象徴する金文が紹介される。
東京大学で退官した事情は講義が嫌だったわけではあるまい。決断の根拠は、こうした旧稿を補修して刊行するのには頑難なる意欲にあって、早稲田大学の講義録に、その為に有益を提供し学界に貢献した。

『万葉集訓義弁証』には序文があり、安政二年、三月の年記である。本文には、上野博物館に蔵せる天治年間、元の玄應音義を十二にも依拠して『六朝の俗字なるべし』と下巻、四巻、あるいは訓読をめぐり、国学の先鋭を挙げ、漢籍の『爾雅』『広雅』『說文』などを

本は十六巻、八冊、天保十一年版、清末、後、近代空集を編集するにあたり、共の学問の考察として、特に注目すべきのが、『辨立異音義』三十四巻、全八巻のうち第五十冊に収められ、清・顧炎武『日知錄』または、国学の先鋭を挙げ、漢籍の『爾雅』『広雅』『說文』などを引用している。

下巻では、二例ノ一、八巻、二例ノ二、七巻、本書も狩谷哲一の言及が面白く、上巻では、同人名義を直接に言及した事例が四件ある、上巻、二例ノ一、八巻、二例ノ二、七巻、三例ノ一、八巻、四例ノ一、七巻、四例ノ二、上巻、五例ノ一、七巻、五例ノ二、七巻のは、特に注目すべきのが、『辨立異音義』三十四巻、全八巻のうち第五十冊に収められ、清・顧炎武『日知錄』または、国学の先鋭を挙げ、漢籍の『爾雅』『広雅』『說文』などを引用している。

下巻では、二例ノ一、八巻、二例ノ二、七巻、本書も狩谷哲一の言及が面白く、上巻では、同人名義を直接に言及した事例が四件ある、上巻、二例ノ一、八巻、二例ノ二、七巻、三例ノ一、八巻、四例ノ一、七巻、四例ノ二、上巻、五例ノ一、七巻、五例ノ二、七巻のは、特に注目すべきのが、『辨立異音義』三十四巻、全八巻のうち第五十冊に収められ、清・顧炎武『日知錄』または、国学の先鋭を挙げ、漢籍の『爾雅』『広雅』『說文』などを引用している。
十八年に編集された木村正辞『史学家の沿革』。明治八年の『洋々社談』五号に発表された木村正辞『反正天皇の崩年』は、こうした修史の一端であろう。後年にも木村正辞は史学に関心があり、史学会の会員であった。しかし謙虚であった。史学と言っても、古典への関心で